

【特集】

〈第33回大会シンポジウム「高校の新学習指導要領をどのように考えるのか」〉

【シンポジウム報告】

高校の新学習指導要領をどう考えるか

—地理教育の現場から—

中野理恵*

1. はじめに

2014年中等社会科教育学会大会シンポジウムのテーマは「新学習指導要領をどう考えるか」であった。「現行学習指導要領がスタートしたばかりなのに、もう次の学習指導要領なのか」というのがテーマを聞いた時の正直な感想である。筆者の勤務校では2年次から地理を履修するため、私自身も新しい教科書で教え始めたばかりであった。本稿では、地方の県立高校の一教員としての立場から、筆者が考える地理の魅力や、地理の授業を通して生徒に身につけさせたい力について述べたい。また現在地理を教える中で問題と感じていることについて、そして新学習指導要領に望むことについても触れたい。

2. 地理の魅力とは

筆者の考える地理の最大の魅力は「実際に自分の目で見て確かめられる」ことである。筆者は新潟県阿賀野市の出身で、阿賀野川をつくる様々な小地形が身近にあった。それが地理に興味を持つきっかけになった。大学入学後は、草津温泉や八丈島など様々な場所に巡検に出かけ、フィールドワークの楽しさを知った。自分の足で歩いてデータを集め、分析する中で、地域の姿が見えてくる。身近な地域でも、実際に歩いてみると意外な発見がある。フィールドワークこそ、地理の醍醐味である。

3. 現行学習指導要領下での現状と課題

大学入試（センター試験）を意識した授業

筆者の勤務校は、ほとんどの生徒が国公立大学への進学を希望しており、原則として生徒全員が大学入試センター試験を受験する。必然的に大学入試を意識した内容となり、進度を確保するため一方的な知識注入型の授業になりがちである。また、生徒は毎朝10分間の小テストを受けることになっており、定期考査と同様に小テストの成績が重視される。10分間の小テストでは一問一答式の問題が中心となるため、じっくりと考え、自分の言葉で表現する力を育むことが難しい

と感じている。

文系地理選択者の少なさ

2014年度の3年生は文系2クラスのうち地理選択者が7名（世界史39名、日本史24名）、2年生は同じく16名（日本史58名）であった。文系は2年次で地理か日本史を選択することになるが、この時点で地理選択者が10～20名程度で、日本史に比べ圧倒的に少ない。地理は私大受験に不利であるという理由で、クラス担任が日本史を勧める場合も多いようだ。また、地理選択者に地理を選んだ理由を聞くと、残念ながら「地理が好きだから」という生徒は例年少なく、「歴史が苦手だから」など消極的理由で選んでいる生徒が多い。

以上の2点は、多くの進学校に共通する課題ではないだろうか。そうした様々な課題がある中、日々の授業を通して生徒に身につけさせたい力、そしてそのために行っている授業の工夫について述べたい。

地理的な見方・考え方

なぜそこで、そのような地理的事象が見られるのか、自然環境や歴史的背景と関連づけながら多角的に考える力を身につけさせたい。「社会科＝暗記科目」という意識を持っている生徒は、与えられた知識をひたすら「丸暗記」しようとする。しかし、それでは本質的な理解につながらない。既習の知識を活用し、様々な角度から考える力をつけてもらいたい。そのために発問を重視し、しつこく「なぜ」と繰り返し問うことを心がけている。また、地形図の読み取りや統計地図の作成など、地図を使った作業学習も重視している。実際に手を動かして作業する中で、生徒は様々な疑問を持ったり、発見をしたりする。それが地理の楽しさを知ることにつながっていくと考えている。

知ることから行動へ

生徒には地域社会で、そして国際社会で活躍できる力を身につけてもらいたい。学んで終わりではなく、学んだことを行動につなげていってほしい。そのため身近な地域についての学習を大切にしたい。身近な

*新潟県立国際情報高等学校

地域が抱える課題について学習を深めていくと、日本や世界が抱えている問題につながっていくからである。例えば地元である魚沼地域の農業が抱える問題を考えていく中で、農産物の輸入自由化の問題や、世界の食糧問題、環境問題にもつながっていく。授業で扱っているテーマについて何かニュースがあれば、新聞記事を配布して紹介することも多い。そうした具体的で、時事的な問題を取り上げることで生徒の興味関心を引き出し、積極的に学ぶ態度を育てていきたいと考えている。

4. 新学習指導要領に望むこと

世界史必修の現状では、地理・日本史が選択となる場合が多く、文系では先述の理由により地理選択者が少なくなってしまう。逆に理系の生徒は全員地理選択という学校も多い。やはり地理と歴史をバランスよく学べるようなカリキュラムが理想である。2015年8月、学習指導要領の全面改定に向けた基本方針が示され、高校の地歴・公民においては「地理総合」・「歴史総合」、「公共」がそれぞれ必修科目として新設されることとなった。今回の方針では「地理総合」・「歴史総合」がともに必修となるため、地理と歴史をバランスよく学ぶことができるという点で、現行指導要領に比べて大きく前進したといえる。「地理総合」については、GISの活用など実践型授業に重点を置くとされる。全員が学ぶべき地理の基礎とは何か。様々な意見があるだろうが、やはり地理の基礎は地図にあると考える。地図は考察したり表現したりする際の重要な道具であ

り、現行学習指導要領では地理A、地理Bともに最初に地図について学ぶことになっている。世界史や日本史でも資料の一つとして地図の活用が重視されているが、地図そのものについて学ぶことができるのは地理だけである。スマートフォンの普及によりデジタル地図がますます身近なものになってきている一方、GISなどICT活用については学校の施設・設備や教員の指導能力に大きな差があるのが現状である。私自身、コンピューターを用いた地図作成等については苦手意識がある。地理を専門としない教員が「地理総合」を担当することも考えられることから、現職教員が研修の機会を持てるようにしていくことも必要である。

5. おわりに

筆者の勤務校は2015年にSGH（スーパーグローバルハイスクール）の指定校となった。本校のSGHの柱となるのが「魚沼学」¹⁾であり、身近な地域について学び、世界に発信していく活動を通して、国際社会や地域社会で活躍できる人材の育成を目指している。大学入試改革も進められ、センター試験に替わる新たな入試制度の検討も行われている。これまでのような授業のあり方を大きく見直す時期に来ていると感じている。「アクティブ・ラーニング」という言葉が注目されるようになってきているが、実際に現在の勤務校においては教科に関わらず多くの授業で日常的にペアワークやグループワークが取り入れられ、生徒も積極的に参加している。変化する時代にふさわしい地理の授業とは何か、日々生徒と向き合いながら模索していきたい。

註

1) 2015年度の魚沼学は10月にスタートし、話し合いの技術について学ぶファシリテーション講座、南魚沼市役所の方を招いた講演会、地元企業の実務家や協力校である明治大学・国際大学の専門家を招いたテーマ別講演会などが開催された。生徒は各種講演会を通じて身近な地域や世界の課題について学んだ後、「人口」「観光」「環境」「国際」「農業」「歴史」の6つのテーマごとにグループに分かれて魚沼の魅力や課題について調べ学習を行い、3月に行われる海外研修において英語でプレゼンテーションを行う予定である。